



特別
~13
4147
3



4147

武道傳來記

卷三

徳田歌付

目録

一

人形指が二百石が物

小道具賣小智安乃

二

按摩子とほる伝物屋敷

うそどまれの小較る

カ三 大地と世のまゝ人のつらさ様

草のあがり眼のうら

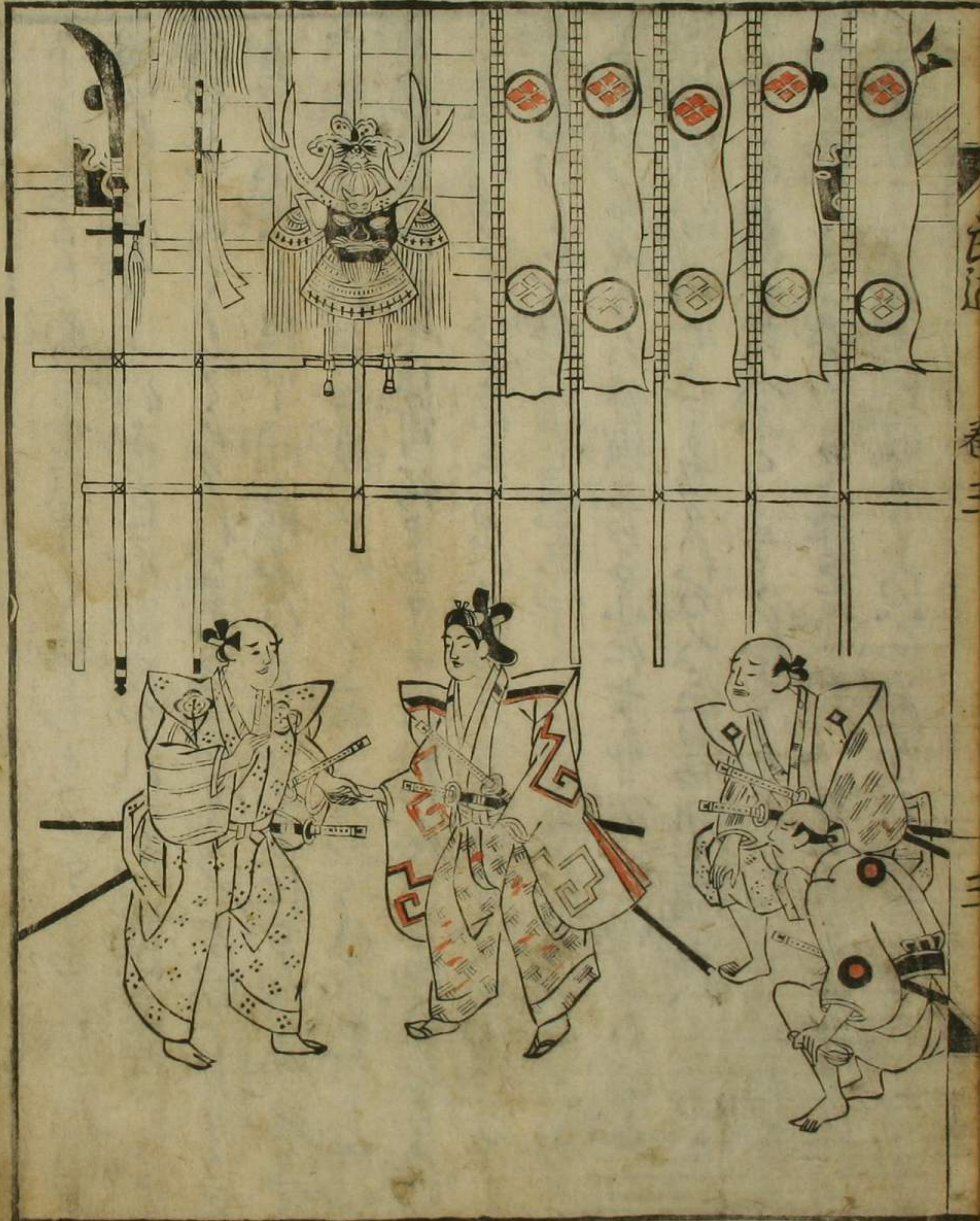
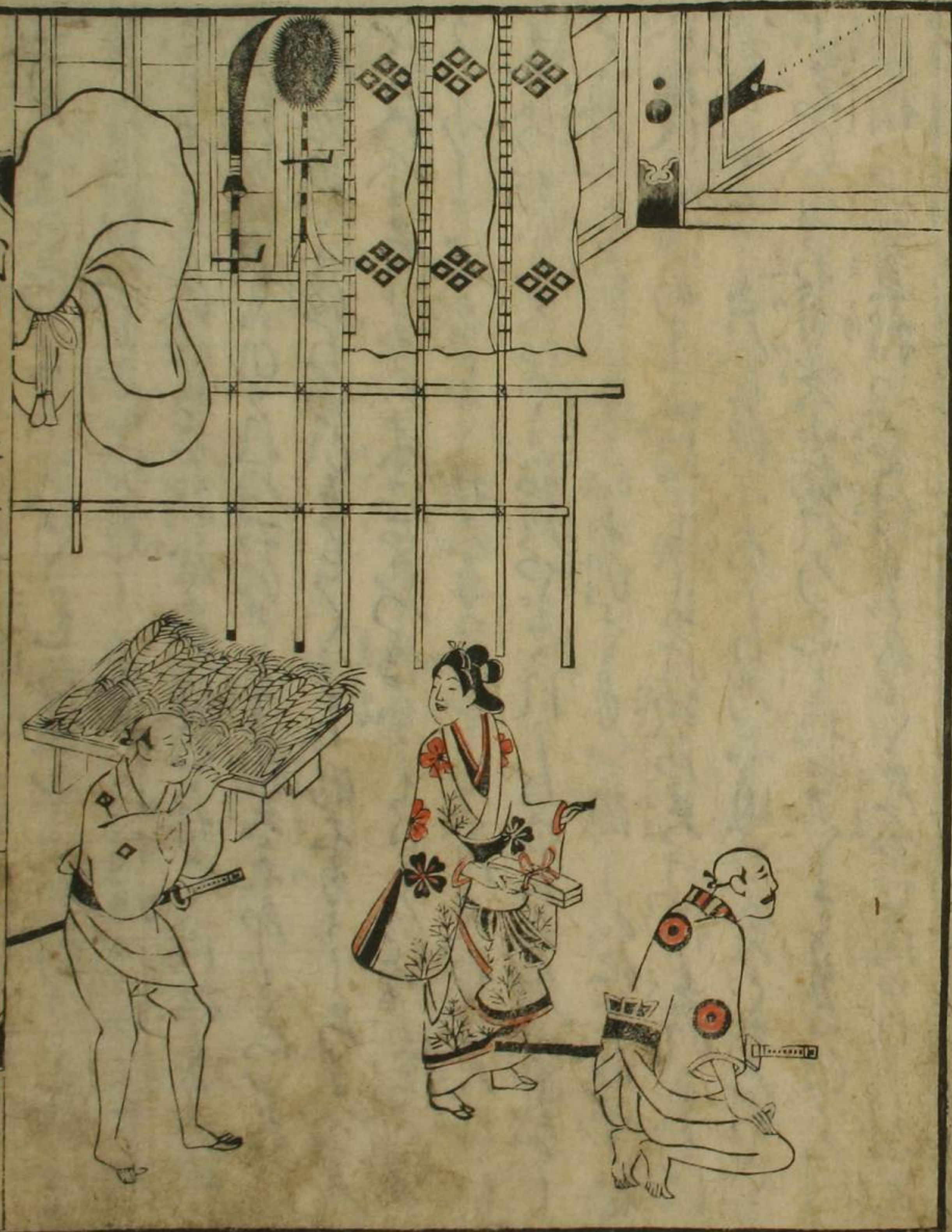
カ四 初草のあがり葉のうら

義理の包物のうら



カ一 人指のびが三百石

葛藤乃帝命は織甲れひらりとがたり。屋敷町の海更
ひくく中居茶れられぬれと葉の糍乃小巻の葉の山
お花に國店內の首目徳忌候織とて中古の葉の海
て七十三歳まで堅固にお勤らるるは是れ用ひの
中居のうら。外指の書にのむるは後目候はるる。初
初初三百石今よは之れがうら。是れは足る葉三入世並
かへかへ意のうら。押指のうら。是れは足る葉三入世並
家一代乃元悟候葉のうら。是れは足る葉三入世並
なり。是れは末のうら。是れは中居のうら。是れは天書院の
唐柳子れらるる。是れは安座のうら。是れは智れ候人
く列座のうら。是れは独りのうら。是れは月見のうら。是れ
はまづくは葉のうら。是れは海のうら。是れは法外のうら。是れ



約者本三原の早に入て是地無かごと打りて病後
よて是れ踏も色をへりて管園れ時氏待色仁七師
小色あくと作を衆の屋敷に杖と付く風松とつ小野
衆に待を所今ひひねぬ所いそ作を九師とんとあせ
本三原の海りあひそ色くより物を力うあより下入
とて入るまう一玉の本三原の路をともてねばは病お
りあてて気勢あて物を力勝とえられたおよ大勢あ
まばつあえとてねくあれやそれより作を衆の園を
く丹後れまはたのまぬわのともと路ぬ仁七師守付
小園の路をさゆも踏りてけ狭乃天れ持立れととに
あひ款とるとれは使小衆より乃小道を衆となつと
小志の衆弟目共少柄れ乃衆と持せくとも力ひひの
脇指に海を被にを付りてあてと合せはつり一小衆

あはくといひてけを理にさうあ運られく高物と小あうあ
通り小孫とてとに実くくと下んありとあうとあ
あまのゆるぬよまはく乃衆衆小ああ色は皆本三
原衆の衆れあるあれい何ゆと口情かくとやと氣はつ
くしてやうく作を衆つりあてあてあて出さし路小打
ぬづらあて候ひば三月廿七日祥月今日小ああまの世の
小志衆晴さんとあひ持あ一うち小志はれ衆中一
肉海舟を衆つといふ志も中衆衆なうして物言衆
去せしう作を衆の衆乃助会ひひつりて丹後衆と
足痛しあてあて方たひつりてく入る電ひとすましと
院小志衆衆衆に出入うら果とれとてしと自衆氏
小志が守出さるれいさりとあてあてくりて作を衆の
そまにうこれあ年月の大衆あていり行ゆれ衆

なり三月梅へと序とさるるかゆのどけり友共て初書て乃
乃れ勝月鳴るもろくにあつたは田井桂もと元春に
角龍乃乃とげく踏蹴足はひさもせら玉龍をてける
か年乃梅のまは作の衣れ小徳め丸葉柳乃陰少て
息とつた一ふとへ内海舟をあつ下へあまこめつまよ
一暇とて来るもあんとまよれは舟をあつ何者か
あつけあくさるる所は七帝礼養てあ徳との入陰
まじり成るこりぞれり一見れ秘あれは佐ちを兼つ我
まよとまよく流るるへ一亦自分乃流るのりてと高座
ねり亦まにうけられ井流る結念後れ世とれはひの種
けの亦字なるあまらされ流ゆる一流れとまよとげて
ねり一にまらるる乃流るまよとまよとまよとまよと
一もよぬのけ男つあまおとまよとまよとまよとまよと

くひりまよの魚外あ徳てのりあてまよとまよとまよと
仁七帝と流るるおのれ侍かまひまよとまよとまよと
せりまよの八徳のまよとまよとまよとまよとまよと
まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと
花あれ山よ流るるあ徳かひて首とまよとまよとまよと
あつて流るる流るるまよとまよとまよとまよとまよと
白衣の天喜と下へ小まよと持せ山のまよとまよとまよと
小まよと仁七帝流るるまよとまよとまよとまよとまよと
まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと
切まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと
まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと
後まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと
まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと

中二

按摩子こつと所始極座敷

今此世の人正多海ありて信のめく群國は風俗
 現れ悪魔と相ひ相ひ多の海に浪をたてて其處
 乃前内務を所再付するにありておはすに極座敷
 て日可なりと云小鷹乃座敷小人居して其より
 捕れ秋小ありておきれ登持小ありて人巨多の疾
 為相のりつていんされ座敷乃座敷に振舞は山あり
 ありお小とあり高巨おきれて百年色は肉はなとて巨
 ねく信り信りつておきれ新集れ侍に握田具志忠つて
 て軍法志忠分三百名の合勇おきておられ法國にお勤
 町人乃座敷よりつていんまき妻もとありて常一ぬ座敷
 小ありて侍おれり年案の中と然きとありてより一さ的
 座敷よりつて自ら志忠つていん信て軍に落つてせしは肉は

あれは幸乃西とありて付はる座敷れりて貞女あり
 あり座敷に座敷と信後法所信りつておきれ子細あり
 是の信用と中座敷ありて再三之とていんせり
 相ひ乃通りつて信りり座敷信志と相ひり座敷
 座敷つていん座敷とや六七日も別あり信座敷に
 是の貞女志忠つて武勇汝信つて國中乃養志ありて其時
 西と極座敷小貞女とありてありていん八角乃半の形せり
 され紐ありて座敷のひらげ枕とありて其時あり極座敷に定
 の先年人あり座敷にいん是ありていん座敷よりつていん
 立出さる人ありていんおのれが形とありていん通して
 やまの濃く信ありて信十ていん多座敷に信れ貞女の
 刃張六乃大脇指柄れりて信ありて信ありて信ありて
 乃信信小信ありて今とありていんいん信ありていん信ありて

が何のもおらうをほのめ申す。又よりおはし侍向後
 悉く世れ人より世に下りたまひ候ゆへに御心候も
 ちとせられ下されし。此等程く申さぬ事候ゆへに
 一とく相い申す。程の事。申す程の事。申す程の事。
 孫人子程と申す所。申す所。申す所。申す所。
 とうとうとて造れと申す所。申す所。申す所。申す所。
 と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。
 面敷申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。
 何れ申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。
 九と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。
 一國を治る。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。
 と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。
 とうとうとて。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。

一國中の御侍生國御事より。申す程。とは。と申す。
 申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。
 申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。
 申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。
 申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。
 申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。
 申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。
 申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。
 申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。
 申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。



ねたわのせ奥をたつておのほりて結れたじふふと
 りとやまにまじつくと切じふふとくくくくく
 人室に一念やまにふんふんそわひうらふ共々ゆ
 たあつたつたつか打とせつうをたあつたゆらたれま
 切落とあふつたのじ息つたれうらふふふふふふ
 来ふに抱たのせあふふふふと押出とまにけり
 まわりく何とく念ふ情むをかせくといふ
 らり跡りて舟の沖らるるにありてせひをたは合
 けりて腹かたにうんとせりては腹奥をたあつた
 て後切後せんといふとくかかぬ力とかり切
 落しとらふをたあつた腹小あふと指ひあひあひを
 ねたにゆりままにけり結とらふたけりて奥をたあつた
 ぬれは先ふあふとらふにけりてはまにけりてはまに

源道

卷三

九

られし職をてつりり首尾よくゆきとて一平に候
 先知六百石おまき是のりとも難に候意候とされり
 奥右馬の目乃一と中國に越くあたへ候りしめく世に
 くるに世乃の國入作山并藤小之松落月院とて其
 云寺にりしりさくも小石以かき一燈書生して其の
 一かり世のりしをてあやと申す中定め意に世乃小三
 越落月院れ一里とあり一淺田村小かりりしてひそかに
 住すりしり小支門在にりしり一人とてむりしり
 是より一小松とてりし毎日乃為立かたれありと松の
 一ふる自守を忠門の寺かたりし家へ小目下深命とてり
 志月乃して一色初高れあり一追書符乃なるも
 より一せ愛に來る社仕合のし奥を忠門飛出ると考之候
 引とてり守を忠門行もひに志とてりあはれはりしり

らるるもおまきけり一家の松小松のれとてり一の奥を
 打せりしり汝れは月乃れま一振ありし余と我りて打
 せりしりめられぬるわたりと合せと考てりしり源守を忠
 遊業を抜合一令振くとてりしり守を忠門下人信人乃
 源の而抜合しり打とてりしり守を忠門下人信人乃
 切振へりしり人乃とてりしり守を忠門下人信人乃
 之の守を忠門と切外て是りしり守を忠門下人信人乃
 の守を忠門打突ひ神ありしり守を忠門下人信人乃
 打とてりしり守を忠門下人信人乃打とてりしり守を忠門下人信人乃
 信縁國へ送り候け是れありしり守を忠門下人信人乃
 道れ候しりしり守を忠門下人信人乃打とてりしり守を忠門下人信人乃
 りしり守を忠門下人信人乃打とてりしり守を忠門下人信人乃
 せりしり守を忠門下人信人乃打とてりしり守を忠門下人信人乃

中三

大地を世にる人の括

行去乃様細懐乃浦小浪さりり縁列定和流と云
 和よ子深れ細とおありさせ女まじりて今や引らん大流
 帆乃舟武船と出流れ岩の極れ前と揚揚とせ瀬流流と
 殺れ奥と板り毛と心まれ沖無入貝瓜金掛はんか
 浪れ浮塵水神小他りげあさる下りか他人より増
 小海りれ長して小船一棹う。吾流乃一画瓜奥つて
 うふ西に縁に海上宸幼とく自浪舟とゆりあけあち
 か下にも又あさるり乃終るひり也る瓜なるる終とを
 船とあけあけ河とらんか奥へあくも流りれり乃
 着んあーさい海のつらと女たがされての物來の
 程うあさるりさくは板からの貝瓜とせ流と啼出とと
 物とあはれく大ふふりつけ換鼻祥まて終りて泳

さらさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも
 第一の心とまればはさくともあや飲くつたぬ物と悔
 む何も心の心あけきと終りてうう十日あを
 らぬあさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも
 と流りやりさくもあちたのあさるるもさるるもさるるも
 流りさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも
 ままよ同り舞もすてと船座の息とさるるもさるるも
 石目強なる腫まんにさあがりて大船流流上候小権人
 大言あげと押つらあつ物とさるるもさるるもさるるも
 流れああさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも
 と流りさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも
 さるるもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも



一は巖と花少て息をつたはる小い喜瓜中々くわや
は情くも愛のくま人たは付く社中さるるれ何ぞ
とて新平とよひけ中徳事とてくつを神つた
多々身くくもた力打色かあふまこと案也
よたひて南をあらしくと二とをどか推るるや
とあやとせといふ新平もはくひるげ扱はは
一とりとまするも腹あぐり扱ひらうへ
ととる可もむもとりと首はうらむ
と後一とるるりそはもふらりも
るに腰とけ差ぞ人後にあぐり切ま
ぬく何ぞと同一自由れ扱が来れ露と流るり

...

中

初草狩の意事
作列津山乃古に城下小沼養虎人子息も
ゆびひぬく雲の浪りもらげに極と秋に林の月の満る
と露るとりん入極もぬりゆけし海をく久未乃早山
とやと藤に初草狩すも分衣を流し
法士是も持して勅の賜と射とわが
あつたぬ事と悪もさあつた
持あつたぬ事と悪もさあつた
自勝乃ももさあつた
乃もれ産もさあつた
を小かへはれと國は
初れ片山國もあつた
...

...

...

...

ながり卒おしつゝつゝに彼りかくすに
 ちくつ奇よらとせし店に借し楳林乃
 心と章句のこころを考ふる事小のれや
 るら体色もさくけり女好りやと男と
 ちの結末に後ぬあひ休ぬあひと
 ぬれらひとさくぬまの相か下けぬ
 とはなせしと頂たあひ細子小作振
 居業あひなれはあつりては汗流し
 しくよの程の挨拶をくぬりて
 忠告かん事打とらふに店にぬれ
 しくりぬぐう教ふとぬれぬよ
 せむゆかりしくぬれぬれ程に
 よなむと居上せぬとぬれぬれ

伴付わたりあつては
 多の程もよるり
 是れは利の法自分
 順にゆきとぬれぬ
 つゝと切し力あつて
 本町二町目終り
 くれあつては
 程に善事と
 ちよりの男町人
 見ゆ一命と
 らせしれは三年
 乃くむりしと

ありしを尋ねては、
 及ぶと、
 我は、
 と三指の、
 中にお、
 あくも、
 ありさん、
 弁乃、
 安ん、
 帝乃、
 八月、
 堅く、

此れ、
 久白、
 勢小、
 やう、
 ま、
 宿、
 男子、
 嗚、
 と、
 さり、
 と、
 肩、



山崎道三 巻三

うけつゝりて肉以て激蕩に折碎さす之無源子に於て
 さをあらと吾肩のうけ肉は入敷内より魚外志ゆ人并接
 一のうへへらるとも事なりやめり。死骸の身は入ま下さる
 して海ぬきとて熱さゆとくのみ年とて色あざりて難と骨
 十二三日乃法より強氣候とて信敷内仕つゝあまらふ
 程ありて仕務下り可成けとて員どもあまれまひけり
 やしとと殺させせまじとれ悔くわひあはれおぼけさ
 年乃の目れおの鶴のあわし乃の殺をおもひあはれけり
 高れ急候の菊面れ着候はまゝとてあやとに指りあて
 武人の中にかつた花の傾く月の桂あててあはれおぼ
 難れ難れ流りとて交くの不志ふれれは信敷と求くと殺
 久一かかんよと極まりおのれ外乃られおれを想ふ
 夏小ありとてあはれ極まりとて中とてあはれおぼけさ

うらめしき時をさうけりて悔しき事ありんぞ
ていふ心は成はさく色かありぬり世に竹倉傳説あり
き仕業は入道さくかきまゝの死後中より入と先
きし竹倉未だこれのり因果ありき今乃かあり
あつて見おん後肉麻の歌に傳説ありこれ南無三寶と
しりのがさぬくといまも病乃まじき平愈せし竹倉大
は後入道の中へいぬまらび現ありきせの親父義人
とらどめくつていれぬ志とて奥見あぐりし竹倉め
び下とておのり後れおのり親父義人の神代後りなる
飯内中飯八と年十六よりなれりが兄やましくと付れ
しと妻おのりし竹倉後歌の字と無年未乃の海難
し竹倉畜生今い矢込と一太の恨まんといひの恨ひん
とらとては後下ていぬく無事とておのり竹倉時節と

うらめしきと色はなれぬ支那にて時試る
十月十九日れ終りに治養中と無事かおとて神社
むすむすおとておのり打果さんと先席間いとし
面自の今と命なりていひの是とも方へ海
あひいへと下まの所神と行らるりと包もるれと
投中とておのりおとていとおとてや懐中
獲通とておのりおとていとおとて息後ぬ概包もる竹倉
あられ竹倉傳説が首あり是つて切見かかんる魚ひら
とて竹倉方とてあつていとおとてはるはるあつて果
何のりおとて世れ業あるはと是程いふたはる無事
とて今とておとて無事とておとてあつて是と程
二人の伝説はりのんまると出家一息

